Ⅱサムエル 12 章「主の前に罪ある者」

自分の罪を指摘される時に、素直に罪を認めて、謝罪することは難しいことです。罪を隠そうとする、自分を正当化しようと理由付けする、自分だけではないと開き直る、そのような自己中心の罪人は自分の重大な問題に気づくことができません。しかし、そんな私たちを主はあわれみ、取り扱ってくださいます。

11 章の終わりに「ダビデが行ったことは主のみこころを損なった」とあります。そのダビデに対する主の取り扱いが 12 章に記されています。

１．罪の指摘とさばきの宣告（：1〜12）

主は預言者ナタンをダビデのところに遣わされました。ナタンは一つの話をダビデに聞かせます。富んでいる人は多くの家畜を持っていますが、貧しい人は雌の子羊を一匹持っているだけでした。やって来た旅人をもてなすために、富んだ人は自分の家畜を調理するのを惜しんで、貧しい人の子羊を奪い取り、旅人のために調理したというのです。このような酷い人の話です。まさにダビデがバテ・シェバを奪い取ったことと同じです。けれども、ダビデは他人事として聞いています。

この話を聞いたダビデは激しく怒って、「主は生きておられる。そんなことをした男は死に値する」と言います。彼は貧しい人に対するあわれみを持っていました。律法に立って、さばきを行うことができました。彼は気づかずに、自分自身に対してさばきを下していました。

すかさずナタンが言います。「あなたがその男です」。ダビデはことばを失ったでしょう。ナタンは神、主のことばを伝えます。まず、主がダビデに与えてくださった祝福を数えあげています。しかし、罪のゆえに彼が苦難を経験することを告げます。「どうして、あなたは主のことばを蔑み、わたしの目に悪であることを行ったのか」と問い、ダビデが神との関係において、奪ってはならない神の役割を奪い、主のことばを蔑んだと、主は指摘します。

そして、罪に対するさばきが宣告されます。剣がダビデの家から離れず、妻たちが奪い取られると言われます。ダビデが行ったことが自分に返ってくるのです。これらのことは、この後の出来事の中で現実となります。

サムエル記第一の最初に記されていた祭司エリに対して神の人を通して神が語られた「わたしを重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む者は軽んじられる」(2:30)。この原則をダビデがいつも覚えており、罪に対するさばきを具体的に知っていたとしたら、罪を犯さなかったかもしれません。

しかし、人は自分の欲に引かれ、誘惑に遭い、罪を犯してしまう最中にあっては、神がすべてをご存じあることと罪に対して正しくさばきを行われることを忘れてしまいます。私たちもそのような弱さを持っています。だからこそ、このような箇所から、主は警告を与えておられるのだと思います。その根本には、神の私たちに対する愛があることを覚えていたいのです。

２．ダビデの悔い改めと赦し（：13）

ダビデは自分の罪を認めました。「私は主の前に罪ある者です」。この告白は随分簡単なことばだと感じるでしょうか。どうしてこんなにあっさりと自分の罪を認めたのかと思うでしょうか。しかし、本当に悔い改めているからこそ、多くを語らないのだと思います。ここに至るまでのダビデには、心の内に絶えず葛藤があって、その上での告白であるということです。そのことがダビデの詩篇から分かります。

詩篇 32 章 3〜5 節。罪を隠していることは苦しいことです。告白すべきであると思いつつも、そうすることを恐れ、その葛藤で疲れ果ててしまいます。そのことを忘れようとします。でも、忘れることはできず、事あるごとに思い出され、心に重くのしかかるのです。

そのようなダビデに対して、主は預言者ナタンを遣わして、罪を指摘し、ダビデが罪を告白するように導かれたのです。そこにはただ責めるだけでなく、赦しを与えようとする主のあわれみと恵みがあったのです。

また、詩篇 51 篇もこの時の罪を悔い改めるダビデの祈りです。ダビデが自分の罪に苦しみ、真剣に神に赦しを願ったことが分かります。詩篇 51 篇の表題〜4 節。ダビデが罪の赦しを切々と願い求めていることが分かります。また、ここでダビデは「私はあなたに　ただあなたの前に罪ある者です」と言っています。ナタンのこ

とばに対してもダビデは「私は主の前に罪ある者です」と言いました。
　これらのことばは主に対する真実な心からのことばです。ここに、人の罪が根本的には主に対する罪であることが明らかにされています。神に対して罪であることを認めて初めて、人への謝罪や償いが真実なものになるのです。そして、主の御前で罪を認め、告白しないなら、主の赦しを受け取ることがないのです。
　51 篇 16〜17 節。神は、罪を悔い改めた心、「打たれ　砕かれた心」を受け入れてくださいます。
　Ⅱサムエル 12 章 13 節。神の御前に罪を告白し、悔い改める者を、神は赦してくださいます。神の恵みは実に大きいのです。その恵みは、罪を悔い改め、赦された者でなければ分からないのです。
　私たちが罪を犯した時も、まず神の御前に自分の罪を認めて告白することが必要です。神に対する背きの罪であると自覚することができるなら、その罪を赦してくださいと心から祈り求めるようになります。そのような「砕かれた、悔いた心」を主はさげすまれず、受け入れてくださいます。救い主イエス様の十字架によって罪を赦し、罪から救ってくださいます。そして、救いの神を賛美し、証しさせてくださるのです。

３．罪の結果の刈り取り（：14〜31）
　主は罪を取り去ってくださり、赦してくださいます。それでも、人は罪の結果を負わなければならないこともあります。14〜15 節。これに対して、ダビデは子どものいのちが助かるようにと必死に祈りました。断食して、一晩中、祈りました。その祈りを続けていました。しかし、七日目にその子は死にました。
　20 節。このダビデの行動を家来たちは不思議に思いました。普通は、家族の死に接したときに、断食して悲しみを表し、喪に服すからです。
　22〜23 節。ダビデは子どもが生きている間は回復のために主のあわれみにすがり、主がお考えを変えてくださることを願いました。しかし、死んでしまった後は、子どものことは神の御手に委ねました。自分の罪に対する神の裁きであることをダビデは受け入れていました。本来、人のいのちは神の御手のうちにあり、人が何かを主張することなどできません。そのこともダビデは受け入れていたのでしょう。
　それでも、罪を犯したダビデが死なず、子どもが死ななければならなかったことに疑問を感じる人もいるでしょう。ダビデとバテ・シェバは死に値する罪を犯したのですが、神は彼らのいのちを保ち、代わりに子どものいのちを取られました。神はダビデにイスラエルの王としての使命をまだ残しておられました。ダビデの家と王座が永遠に続くとの神の契約の成就に向けて、ダビデとバテ・シェバを生かされました。しかし、子どもの死は、ダビデとバテ・シェバが負わなければならない罰でした。
　これは神の赦しが不完全であるということではありません。罪を赦してくださる神の恵みは十分すぎるものです。それでも、罪を軽く考えてはいけないということです。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります」（ガラテヤ 6：7）。

　それでも、主がダビデに与えた契約は変わらず、主の計画は進められていきます。24〜25 節。バテ・シェバからさらに男の子が生まれます。ソロモンです。主はソロモンを愛されたとあります。
　どうして、バテ・シェバから生まれた子が主に愛されたのでしょうか。他にたくさんいる息子たちの中から、どうしてソロモンがダビデの後継者として主に選ばれたのでしょうか。それは神のなさったことで、私たちには計り知ることのできない神のご計画でした。それでも、私たちに明らかにされるのは、主のあわれみは大きいということです。罪の深い淵から主は救い出してくださり、恵みを与えてくださいます。主はご自身の契約をどこまでも守られます。悔い改める者を赦し、恵みによって生かしてくださるのです。

　この箇所から私たちが信じて、感謝したいことは、主がダビデを霊的な危機から救い出してくださったように、私たちをも罪からきよめてくださることです。罪人の私たちを主はなおもあわれみによって取り扱ってくださり、主の御前に罪を認めて告白し、赦しときよめを求めて祈るように導き助けてくださいます。
　神のあわれみによる取り扱いを、私たちは信じて受け止めましょう。罪を示されるなら、素直に罪を認めることができるように祈りましょう。罪を赦され、きよめられることを真剣に求めましょう。神が真実であり、恵み豊かであることをさらに知ることができるように祈りましょう。